

複合文化学通信

第7号 科目登録特集号

(2007年3月5日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘 編集補佐 / 古川誠之)

「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておこう！」

今回は、ロシア語も担当される桑野隆〔くわの たかし〕先生です。

昨年末に『サーカス：起源・発展・展望』という本を翻訳出版しました。

これをひとまず訳しおえたのは30年ほど前ですが、その当時、

日本ではサーカスはいま以上に厳しい状況におかれていました。

翻訳にとりくんだのは、もちろん、サーカスにたいする人びとの関心をもっと高めたかったからです。

サーカスならではの身体の動きや道化の笑いには、

「世界」を転倒させたり裏返したりする独特の「祝祭感覚」が「記憶」されています。

もっとも、私の研究テーマは、サーカスそのものというわけではなく、大まかにいえば

- 1) 20世紀ロシアの前衛芸術、2) 民衆文化、3) 言語論・記号論、
- 4) バフチンの思想（とりわけ対話的創造論）ということになります。

一見ばらばらに思われるかもしれませんが、じつは、私にとっては、
これらは文化や社会にたいする一面的な見方を批判するためにどれも欠かせないものであり、
サーカスを「解説」する際にもきわめて有効な「装置」になっています。

つぎは、中国語も担当される高橋良行〔たかはし よしゆき〕先生です。

私の専門は中国古典詩（とくに盛唐・中唐詩）ですが、

詩人の伝記論や文学理論よりも、作品の詩表現それ自体に関心があります。

たとえば、ある特定の詩人や時代に特徴的にみられる発想や心象、題材などが、
なにゆえに、どのような核心的詩語をもちいて表現されているのか、といった点です。

また、奈良・平安以来、中国古典詩は「漢詩」として日本の文学史・文化史のなかで
大きな影響をあたえてきましたが、日本人の漢詩との異同（政治・友情・恋愛・飲酒など）や、
その理由も研究の対象です。

近年来、こうした興味や視点、詩語論的手法は、漢詩のみにとどまらず、
短歌や俳句・近現代詩・歌謡曲・Jポップなどについても有効ではないかと考えています。
すなわち、いかなる独創的な詩歌や楽曲も、作者ひとりの個性の孤立的な産物ではありえず、
通時的、共時的なさまざまな影響を複合的に受けており、極言すれば、一首（曲）の名作から、
それが生まれた社会状況や時代精神（思想）のありようを見てとることも不可能ではありません。

名作（曲）にはかならず謎がある、というのが日頃の実感です。

こんな科目をこんなふうに履修しよう

【科目登録へむけてのアドバイス】

複合文化学科は、みなさんが第1期生です。ですから、どんな科目を取ったらいいのか、先輩に頼ることはできません。また、多くの科目は新たに設置される科目ですから、授業に関する学生の情報誌も役にたちません。

もちろん、4月のはじめに行われる「複合文化学科」のガイダンスでも、カリキュラム、とくに1年次に履修すべき科目については、くわしく説明します。

また、複合文化学科は2クラス編成（予定）になり、各クラスにはクラス担任の先生がつきます。その先生が個別に履修上の疑問に答えてくれるはずですよ。

そんなわけで、今回はまず、複合文化学科の第1期生となられるみなさんのために、1年次から履修する複合文化学科の専門科目と1年次の英語以外の外国語科目について、それらをどんなふうに履修すればいいか紹介したいと思います。

「複合文化学テーマ演習」

「複合文化学テーマ演習」は、1年生が対象の演習科目、つまりゼミ形式の授業です。みなさんが発表をし、全員で議論をして、問題を深めていく、学生と教員、学生同士が議論をかわす双方向型の授業です。

「でも、基礎をまなぶのでしょうか？」「いえ、違います！」

たしかに、多くの大学や学部では1年の演習が設けられている場合、「基礎演習」といって、これから学ぶ学問分野の基礎的な知識を多少双方向的な形で学ぶといった授業になっていることが多いようです。

しかし、すでにいろいろなところで述べてきたように、複合文化学科のカリキュラムは「まず入門から基礎、そして応用へ」という通常のコンセプトとは逆に、まずそれぞれの【問題系のうちもっともアクチュアルなものをあつかうことから始まり、具体的な問題の複合文化的アプローチを知ったうえで、その背後にある基礎概念や方法論、歴史的背景やこれからの課題へと進んでいきます】。

つまり、「複合文化学テーマ演習」とは、複合的な文化現象について各教員がすでに行っている複合文化的アプローチをみなさんと共有していく場なのです。ですから、あつかう問題系も、何か特別な知識がなくても、みなさんがすでに知っているテーマが設定されています。

わかりやすくいえば、「複合文化学テーマ演習」は、1年次の演習によくみられる「専門をうすめた入門用の授業」

ではなく、【身近でありながらももっとも複合的な問題をあつかう専門科目】です。

すでに、この通信の第4号で紹介したように、すべて半期で12の「複合文化学テーマ演習」が開設されます。

1. 映画のなかで飲食はどう表現されているか
2. ファッションと不在の身体
3. 中国 ざ・テレビジョン
4. 日常のなかにあるさまざまな差別に気がついていませんか
5. モノの都市論
6. 〈歌〉に込められた思いを読み解く
—— 短歌からJポップまで ——
7. 舞台の美学 — 歌舞伎からミュージカルまで —
8. アヴァンギャルドと非公式文化
9. 〈他者〉発見のメカニズム
10. 越境する東アジア大衆文化
11. 映像にみるハイブリッド
12. この絵は美しい！？

絵画や映画といった視覚芸術に興味のある人は、1や3、11や12がおすすめです。

ファッションをはじめとした都市文化に興味があれば、2や5が面白いはずです。

哲学的な問題に興味があれば、思想的な問題を日常から考察した4や9がとても興味深いと思います。

音楽や舞台に興味がある人には、6や7が刺激的であるにちがいありません。

複合文化学は、これまでの地域研究とは異なるコンセプトですが（つまり、グローバル化によって進行するより広いレベルでの文化の複合性に注目する学問ですが）、中国やアジアの文化、とくにそのサブカルチャーに興味がある人なら、3や10を受講すると、多くの発見があるはずです。

もちろんみなさんの関心は多岐にわたっているでしょうから、それらをクロスさせて、自分の関心をしばめることなく、大いに興味の範囲を広げていってください。

こんなことをわざわざいうのも、学問とか研究というのは、何か特別な狭い問題を追求することだ、つまり、自分の幅広い興味関心をせばめることだという思い込みがしばしばみられるからです。複合文化学は、身近なものごとに幅広く関心を広げていくことから、はじまる学問です。そ

のことを、みなさんによく知ってもらいたいから、こんなことをいうのです。

卒業単位という点からいえば、12の「複合文化学テーマ演習」から、前期に1科目以上、後期に1科目以上、合わせて2科目以上履修する必要があります。そのことを考えて「複合文化学テーマ演習」の多くは、テーマ別に前後期同じ時間帯に設定されています。

でも、複合文化学科に来られるみなさんは、おそらくハイカルチャーからサブカルチャーまで、政治的な問題から身近な文化現象まで、さまざまなものに興味があると思うので、ぜひ、2つといわずに、自分の興味と関心にしがって、3つ4つと取ってみてください。もちろん、演習を半期に2つは大変というのであれば、2年になって履修することも可能です。

まず、自分のもっとも関心のあるテーマの演習を2つとって、さらに2年にもう1つということも可能です。ただ、演習は最大20名～24名の定員となっていて、それを越えると履修できないこともあるので注意してください。

「なぜ、定員があるのかって？」

それは、かならず1回はみなさんに発表してもらうためです。また、発表について、みんなで議論するためです。100人の受講生がいては、半期90分の授業で全員が発表することはおろか、発言することさえできません！

「授業の形態はどうなるのかって？」

これは重要な点ですね。最初の1・2回は教員のプレゼンテーションになると思いますが、そのあとは、そう、みなさん自身の発表です。

「え、そんなに早く！」

大丈夫です。どの先生がたもみなさんに適切なアドバイスをしてくれるはずです。また、テーマによっては、みなさんの方が教員より多くのことを知っているかもしれません。そんなとき、先生がたは、みなさんにどうしたら発表としてまとまるかをきっと助言してくれます。

このようにして発表のスキルを学び、さらに学期末にそれを文章化することで、今後の大学生活の柱となる論文力を身につけるのが、この授業のもう一つの重要な役割です。

さあ、これまでの知識を生かして、みなさん自身が興味のある複合的な文化現象に、先生がたとともに楽しくアプローチしていきましょう。

「複合文化学の建築物」

複合文化学科は他の学科以上に、学生の関心を大切にする学科です。このことは、みなさんが選択必修科目（選択科目A群）として学ぶ4つの「建築物」に端的にあらわれています。

「建築物」についてはすでに『複合文化学通信 第2号』でも説明しました。本号では、みなさんが科目履修をするにあたって迷いそうなトピックに焦点をします。

まずは、4つの「建築物」を列举しておきましょう：

複合文化学の建築物Ⅰ 知覚のメタモルフォーゼ

—聞こえ方や見え方、味わい方や感じ方にも歴史がある—

複合文化学の建築物Ⅱ 他者たちのシーン

—他人と他者ってどう違うの？—

複合文化学の建築物Ⅲ 文化というハイブリッド

—〈文化〉は雑多のものから引き算して作られる—

複合文化学の建築物Ⅳ 自然というトポス

—人工化されていない自然はどこにある？—

(1) 他の学科の学生は「建築物」を「学部共通科目」として履修しますが、複合文化学科の学生は「建築物」という名称のついた4つの科目のなかから、少なくとも2つ★**専門科目**★として履修します。同じ「建築物」を履修していても、他学科のお友だちとみなさんとは、「建築物」は別の科目グループに属するものとしてカウントされますので、注意してください。

(2) 「建築物」を4つとも履修することは可能です。いや、むしろその方が望ましい。複合文化学科では、みなさんがなるべく早い時期に、卒業論文のテーマの方向性を決めることが求められます。もちろん、大雑把な形であってもかまいません。そのためには、一年生のうちに、複合文化学のレパートリーをすべて知っておくことが大切です。大学や学部を選ぶ場合もそうでしたよね。できるだけ多くの情報を集め、選択肢をずらっと並べておいてから、自分に向いているものや気に入ったものを選んででしょう。

(3) みなさんが選びやすいように「建築物」には、長い副題を付けておきました。ただし、ちょっと反省モードもこめていえば、どの副題にも耳慣れないカタカナが混入しています。「メタモルフォーゼ」、「シーン」、「ハ

イブリッド」、「トpos」です。ざっくりと日本語訳をあてれば、メタモルフォーゼ＝変容、シーン＝光景、ハイブリッド＝雑種、トpos＝場所となります。

これをふまえて、4つの「建築物」を、具体例をまじえつつ意識すれば、「知覚のメタモルフォーゼ」は【見えるもの聞こえるもの美味しいものは時代によって変わる】、「他者たちのシーン」は【他者というのは最初から他者なのではなくて、目の前の人々が他者としてくくられる光景が最初にある】、「文化というハイブリッド」は【日本文化も、実は、中国やインドや韓国さらには欧米からの輸入品で構成されている雑種だ】、「自然というトpos」は、【子供は無垢で自然だとよくいわれるけれど、そのとき自然は人の手が入っていない場所として思い描かれている】となります（実は、上で使った「トピック」と「トpos」は語源的に同根です）。

どれも、なんとなく哲学的な感じですが、複合文化学の授業はどれも、「たとえば」から始まりますから安心してください。

では、なんでカタカナにしたのか。

聞き慣れないカタカナ書きにすることによって、耳慣れた事態を新たな目で見つめなおすことができるからです。

「たとえば」、「立場」や「姿勢」を「スタンス」といいかえることで見えてくる関係があるはず（ただ、最近「スタンス」も日本回帰して「立ち位置」に変じていますが←彦麻呂ふうに言えば「日本語のミュータント現象や」でしょうか）。このような操作は少し学問っぽいタームでいいかえると、「異化」と呼ばれます。ロシア語発でドイツ語に輸入された概念です。英語だけしか知らないと、このあたりの事情がわかりません。だからこそ、複合文化学科では英語以外の外国語が必修になっているのです。

「複合文化学の開拓地」

1年生以上を対象にした講義科目です。複合文化学の土台にある社会科学や自然科学のフィールドを理解し、より広い学際的なアプローチへの視野を開くためのものです。

複合文化学が社会科学や自然科学と共同するために、環境や言語・メディアという複合的なテーマに関して各分野でのアクチュアルな問題を通して、各専門分野固有の視点と方法論を学ぶことをめざします。

履修方法としては、すべて半期科目である「複合文化学の開拓地Ⅰ～Ⅳ」の4科目から最低2科目4単位を選択して履修してください。なお、講義は複数教員により輪番制で行われます。

それぞれの科目で扱う内容は、おおむね次のようなものです。

複合文化学の開拓地Ⅰ／Ⅱ「サイエンスへの広がり」（前期／後期）では、

複合的なシステムとしての地球について考えます。現在では、多くの「物」と「事」がたがいに関連し合い、影響し合って動いています。そのような地球に起こる事象をひとつのシステムとしてとらえ、生物、地球科学、経済、法律など、自然科学や社会科学から、地球という複合的なシステムについて複数の視点から考えます。

複合文化学の開拓地Ⅲ「メディア・言語への広がり」（前期）では、

メディアと言語が作る複合的な表象をさぐります。現代の複合的な表象は広い意味でのメディアと言語によって作りだされています。その複雑な在り方を、メディア論的視点と言語学的手法から捉え、考察していきます。

複合文化学の開拓地Ⅳ「メディア・言語への広がり」（後期）では、

同じくメディアと言語が作る複合的な表象を探りますが、とりわけマスメディアによる《放送》ではない情報《通信》メディア、とくにインターネットによってもたらされている現象を、言語学的手法や情報学的な見方から考察し、さらに放送と通信の融合に関しても考えます。

「情報に関連する科目」

複合文化学科は文理融合、すなわち総合科学としての性格を強く持っています。

総合科学を支える基盤の一つが広義の情報学です。複合文化学科では、情報科学や情報工学の専門家の育成を目的にはしていませんが、今日の学問的、社会的問題はもちろんのこと、みなさんが卒業後、実社会で必要となるツールや考え方の多くは広義の情報学にふくまれますので、これを学ぶ必要性はとて強いのです。

複合文化学科では、必修科目と専門選択科目に情報系の科目を設置するとともに、メディアネットワークセンター* (MNC) 設置科目を組み合わせみなさんが効率よく情報学の分野についても学べるように配慮しています。

また、演習・卒業論文でこの分野についてより深く学ぶことも可能になっています。

（複合文化学科の必修科目）

（カリキュラムに関してはシラバスを参照してください）

「ツールとしての情報通信ネットワークⅠ（情報化アカデミックリテラシー）」

教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目「情報機器の操作」として読み替え可能です。カリキュラムにふくまれますのでMNCの「情報基礎演習」を履修しないでください。

「ツールとしての情報通信ネットワークⅡ（視聴覚教育メディア論）」

博物館学芸員資格取得のための「視聴覚教育メディア論」として読み替え可能です。カリキュラムにふくまれますので教育学部設置の「視聴覚教育メディア論Ⅱ」を履修しないでください（ただし「視聴覚教育メディア論Ⅱ」と異なり教職に関する科目「教育の方法及び技術」として読み替えられません）。

（複合文化学科の専門選択科目）

「ツールとしての情報通信ネットワークⅢ,Ⅳ」

「マルチメディア基礎と応用Ⅰ,Ⅱ」

どちらも情報化社会を支えている基盤について学びます。

情報系の科目は途中で欠席するとその後の授業についていけなくなると思われるので注意してください。

科目によっては履修の前提条件として高等学校程度の数学とC言語の基礎知識が必要になることがあるので、シラバスに注意してほしいと思います。C言語はMNC設置科目で学ぶことができるので、MNCのシラバスを参照してください。

* メディアネットワークセンター（MNC）

全学の学生を対象とした情報リテラシー教育・マルチメディア教育の提供および高度情報化社会に対応した研究の推進ならびにそのための情報利用環境の提供を行う、学部とは独立した組織です。<http://www.waseda.jp/mnc/>

「外国語科目」

複合文化学科の新入生は、「外国語A」として、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語の中から一つを選択します**。

まず、1年次でかならず「……語の基礎」（週2コマ）と「……語のコミュニケーションの基礎」（週1コマ）を

同時に履修してください。「……語の基礎」は週2回の午前中の授業で、「……語のコミュニケーションの基礎」は一部の例外を除き、基本的に夕方の授業です。

「……語の基礎」（週2コマ）と「……語のコミュニケーションの基礎」（週1コマ）は、自分の時間割りに合わせて、それぞれみずから選んでください。

今年度から「外国語A」の履修形態が大幅に変更されます。これまでは、どの学科専修の学生も1年に2科目4単位、2年に2科目4単位が必修でしたが、今年度からは「外国語A」の必修単位数は、学科専修によってとなります。

複合文化学科のみなさんは、1年次に「外国語A」を2科目6単位（計週3回の授業）かならず履修してください。別の学科の友だちに合わせて、「……語の基礎」（週2コマ）だけを取るなどということがくれぐれもないようにしてください。

2年生以降は、みなさんは、「複合文化学科の専門科目」として、それぞれの語の「ツールとしての……語」、「……語演習」を順番に履修していくことになります（半期ごとの科目をずっとつづけて履修していきます）。

これらの2年次以降の科目は、他学科他専修の学生も履修可能ですが、その場合は「外国語科目」という位置づけになります。

外国語としてはもう1つ必修科目となっている「英語」があります（外国語B）。これは入学前にかならずレベル分けテストのWetecを受け、指定されたレベルのクラスを選んでください。

** 朝鮮語は、3つ目の言語として履修可能です。もちろん、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語を3つ目の言語として履修することも可能です。

ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語の既習者は外国語A（1年次の科目）の履修免除を申請することができます。面接により申請が認められると、1年目から2年次向けの授業を履修できるようになります。また、1年次のみ外国語Aとして朝鮮語を選択することもできます。ただし、外国語Aとして朝鮮語を選択してしまうと、外国語Aの履修免除の申請ができなくなりますので、注意してください。

その他の「共通科目」や、「他学科他専修の履修可能科目」、「全学オープン科目」等は、自分の興味関心にしたがって、あまり無理のないように履修してください。これらについては、先輩の助言も役にたつでしょう。

《バベル》 2006年 メキシコ

アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督

出演：ブラッド・ピット、ケイト・シェット、ガエル・ガルシア・ベルナル、役所広司

これから公開される映画ですが、アカデミー賞の助演女優賞候補に菊地凛子がノミネートされたこともあり、すでに話題になっていますね。

メキシコ出身の監督ゴンサレス・イニャリトゥは、階層や日常生活を異にする人々が交通事故などの事件を通じてたがいに意識せぬまま出遭い、そのことによってドラマが尻取りゲームのように連鎖するという構造の作品（《アモレス・ペロス》《21 グラム》）を得意としています。前者はメキシコ、後者はアメリカが舞台でしたが、《バベル》ではアメリカ、メキシコ、モロッコ、日本という具合にスケールが拡大され、英語、スペイン語、ベルベル語、日本語など複数の言語が使われているのが特徴です。

モロッコの村の羊飼いの少年が撃ったライフルの弾が、バスの窓ガラスを突き抜けてアメリカ人夫婦の妻に当たり、夫婦は帰国できなくなります。留守宅には2人の子供がいて、メキシコ人の乳母が世話をしていますが、故郷の息子の結婚式に出るために、乳母は仕方なく2人の子どもを連れて行くことにします。車を運転するのは乳母の甥。この甥が、帰りに国境の検問所で乱暴にあつかわれたことからキレて、車を暴走させてしまいます。やがてライフルの来歴が分かります。東京に住む会社員がモロッコに狩猟に行ったときに、現地人ガイドにプレゼントしたものだったのです。こうしてひとつの事件が異なる世界の人々や事件を見えない糸で結びつけていきます。

タイトルは旧約聖書の一節から採られ、神に傲慢を咎【とが】められた人々が共通の言葉を失って混乱し、コミュニケーションができなくなったバベルの町と、現在の世界が重ね合わせられています。

現在、人々の間には、アメリカとメキシコを隔てるフェンスのような可視の境界もあれば、銃撃をただちにテロと結びつける観光客の心の中にあるような、不可視の境界も存在します。映画はそれらを容赦なく暴き出します。しかし、前の2作ではディスコミュニケーションが生む暴力や痛みに焦点を当てていた監督ですが、今回はディスコミュニケーションを修復するものとしての〈愛〉を強調しているようです。

また、映画は異文化という他者への理解と尊重そして愛の重要性を訴えているようでもあります。メキシコ人の監督は、アメリカ人が奇異で劣ったものと見なしがちなメキシコ文化、たとえばフィエスタの楽しさを、偏見をもたないアメリカ人の子供の目を通じて生き生きと描いてみせます。偏見が偏見を生んでいるような今の世界で必要なのは、この子供たちの目のように澄んだ目なのかもしれません。(N)

第8号（新入生歓迎号）は4月1日発行予定です。

背景画像：大山千枚田（千葉県鴨川市）、©2007 I. Fukuda